

研究タイトル：「ものづくり塾を通じた高齢者の居場所づくりと活躍の場の創出」

坂口大史（日本福祉大学健康科学部福祉工学科建築バリアフリー専修 助教）

研究期間：2018年10月～2019年9月

研究対象地域：愛知県半田市亀崎地区

1 研究課題と枠組み

少子高齢化がさらに進行していくことが予想される研究対象地域において、地域の高齢者が継続的かつ主体的に自身の潜在能力向上と能力発揮の場を創出し、「自助・互助・共助」と「公助」の連携をより高め、地域の支え合い、高齢者の生きがいや自己実現に寄与する仕組みを構築する。

2 研究方法

本研究では、高齢者のものづくり塾参加前後における意識の変化に関するデータをアンケートにより収集し、意識を数値化して解析を行う。また、高齢者の活動に対するモチベーションの向上と活動の持続性確保のため、活動の中心を担う高齢者リーダーを重点的に養成し、人的資源の確保にも努める。

3 研究成果と各活動内容の分析

・2018/10 研究の全体計画と関係者との調整

2018年9月21日に、半田市社会福祉協議会（以下、社協）と活動内容及びスケジュール調整を行った。その際、高齢者の活動基盤として、女性高齢者グループ「亀の会」、男性高齢者グループ「亀崎思いやり応援隊（K00）」と連携して講師トレーニングを開催することとした。

・2018/11 ものづくり塾のカリキュラム策定と講師トレーニング

第一回目として、2018年10月25日（女性高齢者向け）、12月19日（男性高齢者向け）に、ものづくり塾を中心となって進めていく高齢者に、小物作りのトレーニングを行った。トレーニング後の反省会において、「高齢者だけでなく、子どもなどの若い世代とコミュニケーションを取りたい」や「ものづくりは若い世代に伝えていく方が良いのではないかな」等、高齢者メンバーから意見が出た。高齢者同士が学んだことを若い世代に伝えていくことは、高齢者の活躍の場の創出と高齢者自身がやりがいを感じられる活動になると考えられるため、子どもやその親も対象として開催していくこととした。

・2018/12 意識調査にかかるデータ収集とものづくり塾の運用開始

2018年10月25日、12月19日のトレーニング開催に加えて、2018年11月17日、2019年1月19日に子ども交えたものづくり塾を開催した。11月、1月の各回で30名以上、20名以上の参加があった。講師の高齢者は他的高齢者だけでなく、子どもや保護者にも熱心に制作指導を行っており、ものづくりを通してコミュニケーションが活発になっていた（図1）。また、制作した作品を一定期間飾っておくことで、参加者のモチベーションの醸成や、当日参加できなかった他的高齢者や子ども達の目に触れる機会にもなり、将来的なものづくり塾への参加者を増やしていく上で効果があると感じられた。

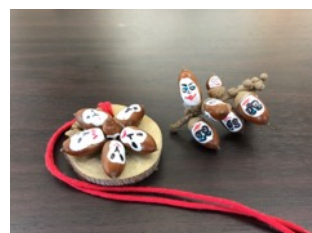


図1 ものづくり塾の様子と成果物の例

・2019/1 ものづくり塾の運用開始後の意識の変化に関する分析

表1 アンケート項目

ものづくりへの関心	1	ものづくりの知識や技術を向上させたいと思いますか
	2	ものづくりは楽しいと思いますか
	3	自宅で、ものづくりをしたいと思いますか
	4	自作品を他の人に使ってもらいたいと思いますか
自己表現	5	自分の能力を発揮したいと思いますか
	6	イベント活動を企画したいと思いますか
	7	自分の住む地域の役に立ちたいと思いますか
	8	新しいことにチャレンジしていきたいと思いますか
	9	誰かと競い合いたいと思いますか
コミュニケーション意欲	10	若い世代に知識や技術を伝えたいと思いますか
	11	友人と集まる機会を設けたいと思いますか
	12	多くの地域活動に参加したいと思いますか
地域とのつながり	13	地域と関わっていききたいと思いますか
	14	地域の居場所を魅力的にしたいと思いますか
	15	気軽に立ち寄れる居場所を発展させたいと思いますか

意識は減退している。これは、地域への貢献に対する意識は高いものの、自身が高齢である意識があり、頻繁に地域活動へ参加する意識は高くないと考えられる。また、(1), (3), (4), (5)において意識が減退していることから、ものづくりに対して高齢者の自尊心があり、自身が作成した作品が子どもに教えられまでの出来栄えまでに至らず、高齢者の意識が減退したと考えられる。これらから、より綿密なトレーニングを行い、高齢者が自信をもって取り組める内容にしていく必要が感じられた。

第2回は女性高齢者8名と子ども15名を対象とした企画であり、クリスマス飾りの製作を行なった。図3より、実施前に比べ実施後の平均点は(1), (3), (6), (8), (9), (10), (11), (12), (13)の項目は減退となった。特に、(10)は次世代に関する項目であるため、ものづくり塾実施前では、子どもが関わることで参加する高齢者の意識が向上すると予想され、ものづくり塾当日の様子においても講師の高齢者が子どもに寄り添い、ものづくりの知識や技術を教えている様子が多く見られたが、結果として減退している。一方で第1回と比べ第2回におけるものづくりに対する意識の(4)や自分の能力の発揮に関する(5)の項目が増加傾向で推移していることから、普段関わりのある高齢者だけではなく、関わる子どもと接する機会が高齢者の意欲向上に一定の影響を与えていると考えられる。

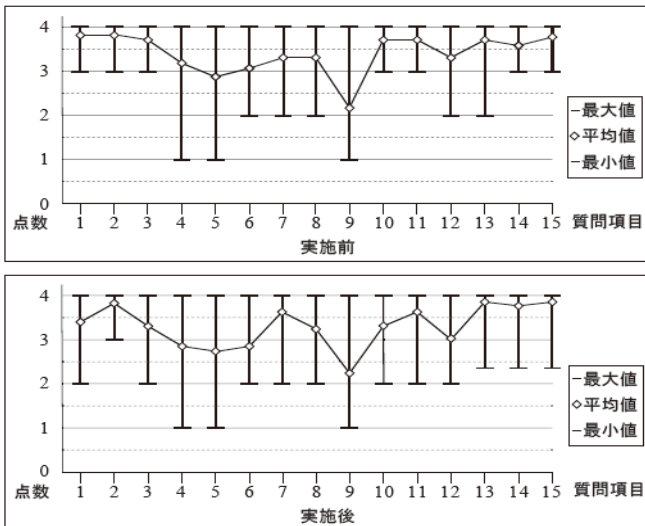


図2 第一回ものづくり塾開催前後の意識の変化

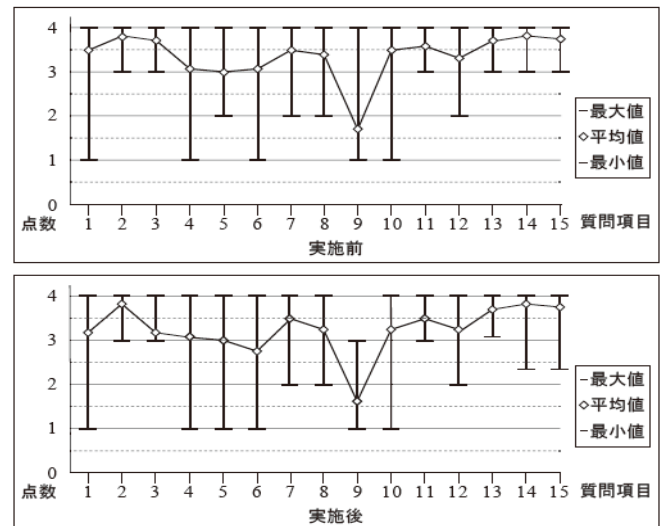


図3 第二回ものづくり塾開催前後の意識の変化

・2019/2 ものづくり塾の運用開始後の実施状況の分析

社協の研究協力者及び高齢者リーダーと、ものづくり塾の運用や実施状況についての分析を行った。これまでの所、概ね計画通りに活動が遂行できており、2019年4月からは、より多くの高齢者が参加できる活動、地域の子どもとも触れ合える活動を展開していくことを決定した。

・2019/3 研究協力者及び関係者との中間検証と日本建築学会支部研究会での発表

研究協力者及び関係者と、各ものづくり塾開催時に収集したアンケート結果を分析結果し、日本建築学会関東支部研究会にて発表を行った。ものづくり塾開催後の意識の変化の特徴として、高齢者の作品制作に対する自己意識が高く、人に教えることを前提とした場合、自分としては満足する作品を制作することができず、意欲がやや低下することがわかった。これより、ものづくりに対する意欲が高い一方で、自尊心に起因して、作品の満足度によって、活動への参加意欲が低下する場合があるため、各トレーニングの質を高め、一定期間展示する作品の見せ方等も工夫する必要があるといえる。

・2019/4 地域ものづくりマイスターの付与と講師定着率の分析

ものづくり塾の講師をしている高齢者のうち女性10名と男性6名を「地域ものづくりマイスター」として認定し、今後の活動の中心的な役割を担ってもらいつつ活動を展開していく計画とした。また、マイスターからの提案で、活動時に着用できるTシャツを制作してチームの一体感と士気を高めることとした。毎回の活動において、マイスターはTシャツを着用し、常時8割以上の出席を確保しながら活動を行った。さらに、高齢者、子ども、その保護者が重層的に関わり、多世代交流による高齢者の活躍の場の創出と地域活性化に繋げる取り組みを行うため、「まち歩き」を企画することで、実際のまちに潜むニーズや課題を自分達で発見して、発見した課題の解決に取り組んでいく計画とした。

・2019/5 収集したデータの分析とトレーニング内容の改善

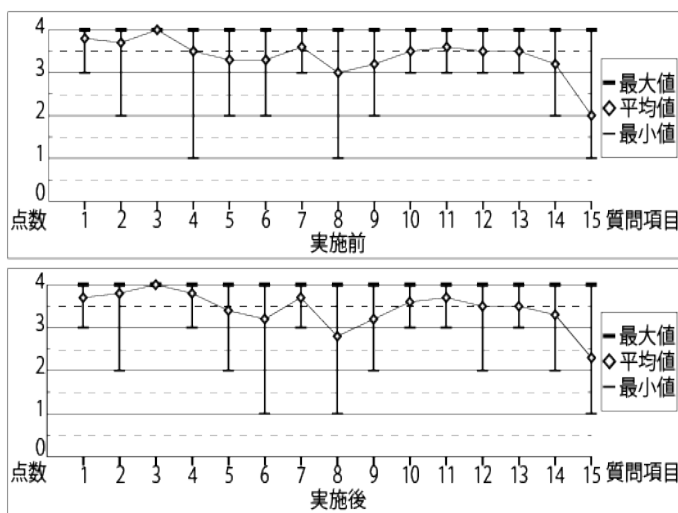


図4 ものづくり塾開催前後の意識の変化

子どもや保護者を交えた幅広い活動に繋げるため、女性高齢者向けの裁縫トレーニング、男性高齢者向けの木工トレーニングを企画した。図4に木工トレーニング実施前後の高齢者の意識の変化についてまとめた。

ものづくりへの関心に関する項目の(4)において増加していることから、ものづくりに関するトレーニングを重ねてきたことから、少しずつ自分が習得したスキルに自信がついてきているといえる。また、地域との繋がりに関する項目である(14)、(15)も増加していることから、ものづくり塾の継続により、高齢者が地域での繋がりや活動拠点を居場所と感じ始めているといえる。

・2019/6 高齢者によるものづくり塾の主体的な運営と様々な居場所の創出

地域ものづくりマイスターが中心となって地域の様々な施設を繋げたイベントを実施すべく、子どもの夏休みに関連した企画を行った。イベントに協力する施設は地域の拠点となる施設であり、将来的に地域の高齢者にとっての様々な居場所や活躍の場になる可能性をもった施設である。

・2019/7 ものづくり塾の参加者定着度の検証と活動の持続性の確保

地域ものづくりマイスターが中心となってイベントを企画して実施するため、各施設との綿密な打ち合わせを行った。また、本研究における節目のイベントとして、多世代交流の促進、高齢者の活躍の場と様々な居場所の創出に繋がる企画、企画に向けた事前トレーニングを行った。

・2019/8～9月 将来的な活動計画の策定

小学生の夏休みに合わせて、亀崎ささえあいセンター、亀崎児童センター、亀崎図書館、街かどサロンかめともといった地域の核となる施設をスタンプラリー形式で周りながら、それぞれのテーマに合わせたものづくりを体験するイベントを実施した。2日間で総勢206名の参加があり、各施設で高齢者が得意とするスキルを活用したものづくりを展開し、子ども達の自由研究にも使えるテーマとしたため大変好評であった(図5)。本イベント開催前後の高齢者の意識の変化をまとめた(図6)。



図5 各施設で高齢者が講師となって子ども達にもものづくりを教える様子

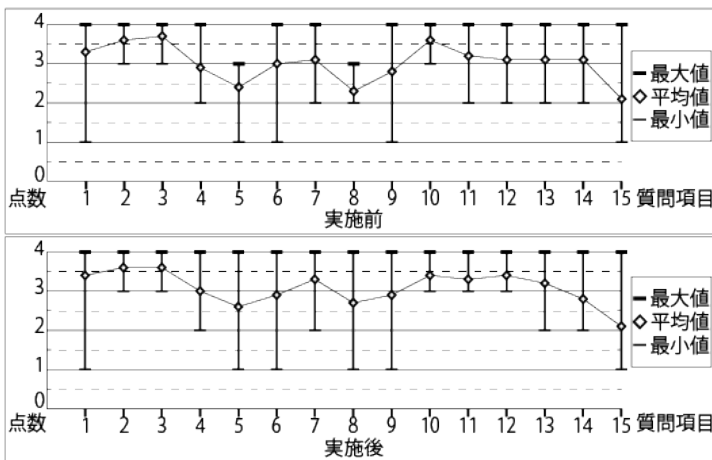


図6 スタンプラリー開催前後の意識の変化

ものづくりへの関心に関する(1)や(4)、自己実現に関する(5)や(7)、コミュニケーションに関する(11)や(12)、地域との繋がりに関する(13)など、本イベント開催前後の比較において、多くの項目で増加傾向であった。これまで積み重ねてきたトレーニングの成果が顕著に表れており、参加人数の多さもさることながら、子どもの学習意欲の高さが高齢者の取り組みにも良い影響を与えているといえる。また、高齢者自身の活躍の場と自分のスキルを若い世代に伝えていく機会として効果的なイベントになったともいえる。今後は、高齢者リーダーを中心にこれまで展開してきた活動における主体性と持続性により注力して取り組んでいく必要がある。

4 まとめと今後の課題

2018年10月～2019年9月の研究期間における活動は順調に推移し、高齢者の様々な居場所づくりと活躍の場の創出に繋がる成果が得られた。具体的には、活動を主体的かつ継続的に担っていく「地域ものづくりマイスター」が女性高齢者10名、男性高齢者7名が務めることになり、今後も活動を展開していく基盤が構築できた。また、高齢者メンバーの発案により、地域の子どもの保護者とも関わりがもてるイベントを高齢者自身が企画した。このイベントで成功を収めたことで、ものづくりを通じた技術の伝承、地域拠点ネットワークの形成、活動に対するモチベーションの醸成、地域内の密なコミュニケーションなどによる、新しい地域包括ケアの仕組みにも繋がり得る成果が得られた。

また、ものづくり塾開催にかかる消耗品や備品を一部購入したものの、想定していたよりも支出を抑えることができた。よって残りの予算を活用して、活動の持続性を担保する仕組みとして、イギリスやオーストラリアなどのDIYを通じた地域高齢者の出会いの場の創出などの先進的な事例を参考に、本事業後も地域の高齢者が継続的にもものづくりを通じた地域活動に取り組んでいけるように、本研究で拠点としていた地域支え合いセンターに「DIYワークショップコーナー」を設置した。

最後に本研究の取り組みにより、高齢者の居場所形成やものづくりを通じた地域活動の促進に寄与するだけでなく、高齢者の日常的な活動拠点の整備や気軽に立ち寄れる場所が複数のネットワークとして形成できた。これにより、多くの高齢者が集い、地域における多世代交流が継続的に生まれ、高齢者自身がやりがいをもって活動に取り組んでいく仕組みが構築できたと考えられる。